

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 19 日現在

機関番号：32501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520190

研究課題名（和文） 修辞表現に関する和漢比較研究

研究課題名（英文） A Comparative Study of Japanese and Chinese in Classical Rhetorical Expressions

研究代表者

白井 伊津子（SHIRAI ITSUKO）

淑徳大学・総合福祉学部・准教授

研究者番号：40323224

研究成果の概要（和文）：修辞表現について、とりわけ中国古典文学における譬喩表現と日本古典文学の譬喩表現を比較検討し、日本古典文学における譬喩表現の独自性を明らかにすることを目指した。結果、『萬葉集』の直喩表現、序歌表現、「詠物」「寄物」歌表現を一覧しうる譬喩表現比較のための基礎資料が整備されるとともに、①『萬葉集』後期に至り、仏典の受容や諺の引用を契機としてあらたな直喩表現の方法が獲得されたこと、②『萬葉集』巻八、巻十の「詠物」歌「寄物」歌に中国詠物詩の譬喩表現の方法を見いだすこと、③懸詞に縁語をとまなう表現や見立ての技法といった、音形式を主とする表現方法が、平安朝和歌において、人事と景物の事象の譬喩関係を表現するための方法として用いられていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to make clear how very unique metaphorical expressions were in classical Japanese literature, after a preliminary comparative survey of metaphorical expressions in classical Chinese and Japanese literature. The study has resulted in the following findings: (A) The basic data have been prepared in list form to ensure that a comparison can be made at a glance between metaphorical expressions in simile, *joka* (序歌) expressions, *eibutsu* (詠物) and *kibutsu* (寄物) in *Manyoshu*. (萬葉集) (B) It has been found (1) that a new type of simile was developed at the later stage of *Manyoshu* (萬葉集) as a result of the acceptance of Buddhist scriptures and with incipient citations from proverbs, (2) that the influence of metaphorical expressions in Chinese *eibutsu* poetry (詠物詩) can be traced in *eibutsu* (詠物) and *kibutsu* (寄物) poetry collected in vols 8 and 10 of *Manyoshu* (萬葉集), and (3) that the form of expression mainly based on sound system was used in Heian Period poetry as a way of describing metaphorical relationship between human affairs and natural phenomena; expressions composed of *kakekotoba* (懸詞) accompanied by *engo* (縁語) or *mitate* (見立て) technique are instances of this expression.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：萬葉集、修辞、譬喩、詠物詩、古今和歌集、懸詞

1. 研究開始当初の背景

(1) 譬喩表現の研究は、語用論や文章表現論の立場から、近現代文の分析が中心となっており(中村明『比喩表現辞典』1977年、『比喩表現の理論と分類』1978年、同『たとえことば辞典』1996、小内一『日本語表現大辞典』2005年)、古典文学作品における譬喩の総合的な研究は、いまだ手付かずの状態にあるといっても過言ではない。その点において、内田賢徳「比喩事典」(『万葉集事典』1993年)の試みは、譬喩が歌の修辞という関係構造の主要な要素であることを示したもので、きわめて重要である。ただし、紙幅の関係上、例の限られていることが惜しまれ、またその後、これを引き継ぐ研究もなされていないという現状にある。

(2) 一方、中国文学受容の研究においては、第二次世界大戦後に小島憲之(『上代日本文学と中国文学(上・中・下)』、『国風暗黒時代の文学(上・中(上))』)、中西進(『万葉集の比較文学的研究』)らが精力的に押し進め、近時では、芳賀紀雄(『万葉集における中国文学の受容』)が緻密な検討を加え、また辰巳正明(『万葉集と中国文学』)が思想的な面を広く覆ったことは喋々するまでもない。

(3) しかしながら、譬喩表現に関して、中国文学の受容という観点から総体的に捉えるという研究はいまだ皆無である。研究書や注釈書の中で個別になされている指摘を検証し、さらに例を加えつつ資料として整理し、その上ではじめてわが古代の漢詩文および和歌における受容の実態が明らかにされるべきである。

(4) 研究代表者は、これまで『万葉集』の主要な修辞技法である枕詞・序詞について研究を進め、2005年に研究成果公開促進費の交付を受けて、その成果を『古代和歌における修辞—枕詞・序詞攷—』として刊行した。従来、枕詞と序詞の研究は別個に行われ、なおかつ形態的な分類や接続の仕方による分類といった域を大きく出ないものであった(福井久蔵『枕詞の研究と釈義』1927年、『新訂増補 枕詞の研究と釈義』1960年、上田設夫『万葉序詞の研究』1983年、山口正『万葉修辞の研究』1984年など)。そうした旧来の枠を乗り越えて、枕詞や序詞を固定的な修辞としてではなく、それらが一定の形式をもつことを手掛かりに、その形式のもつ意味を考察した。そして、古代から平安朝和歌に至るまでの通時的な展開を明らかにした。

譬喩表現に焦点を絞るならば、枕詞と序詞

が譬喩を接点に繋がりをもつこと、さらには序歌と『万葉集』巻十一・十二にのみ立てられる「寄物陳思」の部立中の作品とが、景物と人事との譬喩的なかわりという点から見逃し得ないことを指摘した。すなわち、このような枕詞、序詞の研究において譬喩の問題に立ち入り、いずれの修辞技巧とも深くかわる譬喩の重要性を再認識した次第である。かくて、こうしたわが国の譬喩表現の独自性と上代びとの譬喩意識の形成を明らかにすべく、詩文の譬喩の受容の実態を総合的に考察する段階にはいったと言えよう。

2. 研究の目的

修辞表現について和漢の比較研究を行い、中国文学の受容の実態を浮き彫りにすることが最終的な目的である。

本研究では、就中、中国古典文学における譬喩表現と日本古典文学の譬喩表現を比較検討し、日本古典文学における譬喩に関する中国文学の受容のあり方、および日本古典文学における譬喩表現の独自性を明らかにしていく。とくに中国文学の影響を強く受けた日本古代の漢詩文・和歌に焦点を絞って研究を行い、修辞比較研究の基盤を構築することを所期する。

具体的には、大きく3つの達成目標として、

(1) 譬喩表現比較の基礎資料作成

(2) 上代びとの譬喩意識の解明

(3) 譬喩表現受容の実態解明

を掲げる。

3. 研究の方法

上述の達成目標において、最初に行うべき必要不可欠な基礎作業が(1)「譬喩表現比較の基礎資料」の作成である。この資料は、詩文の譬喩の例と、わが国の詩文および和歌の譬喩の例とを対照できるように整備したものである。わが国の文学作品においては、『懐風藻』『万葉集』を対象とし、中国の文学作品からは、『毛詩』『文選』『玉台新詠』など、日本の古代文学に大きな影響を及ぼした中国の総集類と『芸文類聚』『初学記』といった類書を中心に取りあげる。

次に、(2)上代びとの譬喩意識、(3)譬喩表現受容の実態を解明していく。(2)の譬喩意識の解明に関しては、現在通行している譬喩理論を単に遡上させ、古典作品中の譬喩表現に適用してゆくだけでは意味が無かるう。あくまでも上代の人々の念頭にあった「譬喩」というものに対する理解・意識を明確にすることが肝要であると考え。従って、

中国の文学評論の受容も念頭に置いて分析を行う必要がある。(3)の受容の実態に関しては、(1)の資料作成を進めながら、譬喩に関係にある事物・譬喩表現に用いることば・譬喩表現の通時的な展開、譬喩とかかわる修辞技法などの視点を設けて考察を深める。

上述した3つの達成目標のうち、最初の2年間(H22年度・23年度)で、

(1) 譬喩表現比較の基礎資料作成に取り組み、また、この基礎資料の作成と同時進行のかたちで、

(2) 上代びとの譬喩意識の解明

(3) 譬喩表現受容の実態解明

のための考察を加えて、順次成果を論文として公表し、最後の1年(H24年度)で(1)を完備し、研究の最終的な総括をする。

4. 研究成果

(1)『萬葉集』の直喩表現、序歌表現、および巻八、巻十の「詠物」「寄物」歌表現と、上代文学にかかわる中国の詩文の例との関係を一覧しうる、譬喩表現比較のための基礎資料が整備された。さらに例を網羅し、資料としての充実をはかるべきであるが、比較の目安となる規準を立てることができた点は意義深いと考える。さらに、この「譬喩表現比較の基礎資料」の作成の過程で、問題とすべき修辞技法や譬喩表現の受容が浮き彫りになった。以下の、(2)から(4)にその成果を記す。

(2)『萬葉集』における、直喩表現をなす歌を直喩の形式として捉えた結果、萬葉前期と萬葉後期とでは、そのありように違いが見いだされることが明らかとなった。すなわち、前期では、所喩句と能喩句との類似性は、モノと属性との関係において、その一々が対照されてあった。だが、後期の歌になると、述語の繰り返しを持つ点で、形式的には同じであっても、譬喩の対応のあり方が、語と語の段階から、叙述的まとまりをもった句へと変化を来している。その変化は、観念的な意味を具象的な事柄の叙述を通して説く仏典や、句が自律性を保って何らかの意味を喚起するにいたる諺を能喩に取り込む歌に顕著であった。つまり、これは、モノとその属性の抽出という分節的なありようが、主語と述語による叙述性へと置き換わっていくという実際を示している。

こうした展開は、隠喩を中心に据えた序歌形式の整いに加え、大伴家持によって寓喩を基本とする「譬喩歌」の部立が設けられるなど、萬葉後期における譬喩に対する強い意識と連動すると考える。ゆえに、直喩を一首の形式とする短歌が後期に至って成立するのもそうした意識のひとつの具現化だと捉

えてよい。

(3) 譬喩表現受容の実態の解明において、もっとも微妙な問題をはらむ、『萬葉集』の巻八と巻十および巻七と巻九の、譬喩表現にかかわる歌について、巻十一、巻十二の序歌との関係を踏まえつつ検討を加えた。すでに、大伴家持の詠物歌や『萬葉集』の巻八の「雑歌」に収められる歌については、中国の詠物詩の影響が論証されてきたが、艶情との合体、「物」への感情移入ないし擬人法的表現などは、譬喩表現の方法に深くかかわるものである。そうした詠物詩の方法が、巻十の「詠物」の歌のみならず、「相聞」の部立に設けられている「寄物」の項目の歌にも見出しうることを確認しえた。そして、このことが、序歌をひとつの方法として展開してきた『萬葉集』の歌の、あらたな譬喩の表現方法の獲得であることを強調しておきたい。すなわち、『萬葉集』の相聞の歌を通時的にみればあい、それまでの序歌、寓喩表現を一首の形式とする歌に加え、萬葉後期に至って、詠物詩を踏まえた詠物の歌の方法が、譬喩の方法として取り込まれていること、なおかつ、それが、『萬葉集』の編纂においても、巻十の「詠物」「寄物」に反映していることである。それらはとりもなおさず、それまでの、序歌、寓喩といった譬喩表現のあり方を反省的に見なおし、あらたな可能性を開こうとした、上代びとの譬喩意識の現れと捉えてよいだろう。

(4) 譬喩表現が、懸詞に縁語をとともなう修辞表現とも密接な関係を有するのみならず、見立ての技法にも展開していく実際が、『萬葉集』から『古今和歌集』の懸詞の通時的な分析を踏まえて明らかになったことは、とりわけ有意義であった。

すなわち、譬喩表現の基盤となる、景物の事象と人事との関係は、『萬葉集』においては、主として序歌が担っていた。序歌のばあい、序詞と本旨とは同一の文脈をなすものだが、『古今和歌集』では、ふたつの文脈を築く懸詞と縁語においても、景物の事象と人事とが譬喩関係をもつ。それは、音と意味ということばの両面を反省的に捉え、同音の形式に景物の事象と人事のふたつの意味を隣接させうるものとして、懸詞—異なるふたつの文脈を導く機能—を方法的に捉えなおした結果だと考えられる。つまり、こうした懸詞の方法こそ、平安期に入ってから和歌の譬喩表現における独自性として認めることができる。

『古今和歌集』におけるその独自性とは、景物の事象と人事との譬喩の関係を懸詞が保証するあり方である。つまり、音形式を媒介とする意味の相違の上にたつて、景物の事象と人事というふたつの文脈が隣接的に成り立っているということ、両者が相互に規定することによってあらたな表現の質を獲得

しえているということである。景物の事象の中に眺められ、ことばとして引き出された人事を、ことばの音形式によって確認し、再構成することを可能にした『古今和歌集』の歌には、ことばが事象に輪郭を与えていくことへのたしかな気づきがあると捉えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 白井伊津子「萬葉後期の譬喩表現—直喩の形式—」(「国語と国文学」87巻11号) 査読有, 2010年
- ② 白井伊津子「古代和歌における懸詞の方法—音形式に隣接する意味のあり方をめぐって—」(「高岡市万葉歴史館紀要」22号) 査読有, 2012年
- ③ 白井伊津子「萬葉集の「詠物」と「寄物」」(「美夫君志」87号) 査読有, 2013年

[学会発表] (計1件)

- ① 白井伊津子「「詠物」と「寄物」」美夫君志会全国大会(中京大学)2012年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

白井 伊津子 (SHIRAI ITSUKO)
淑徳大学・総合福祉学部・准教授
研究者番号: 40323224

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし